



Data

監督・脚本: イ・ウォンテ

出演: マ・ドンソク / キム・ムヨル
 / キム・ソンギョ / ユ・スン
 モク / チェ・ミンチョル / キム・ユンソン

■■ショートコメント■■

◆韓国映画はこの手のバイオレンスアクション映画が大の得意。しかも、二大スターの共演は多いが、本作は「極悪組長×暴力刑事 vs 無差別殺人鬼」をうたい文句にした三大スターの共演で、それぞれの個性が際立っている。とりわけ、極悪組長を演じたマ・ドンソク存在感は抜群だ。

ストーリーは、車に追突された上で、刺殺されるという理不尽極まりない連続殺人事件が続く中、何と極悪組長のチャン・ドンスが襲われるところから本格的にスタートする。刃物を持った犯人に対して、腕に覚えがあるドンスが素手で立ち向かい、ほとんど犯人を圧倒したものの、命からがらドンスの手を逃れた犯人が車でドンスを吹っ飛ばしたから、さすがにこれでドンスもノックアウト。普通ならこれで死んでしまうところだが、不死身のドンスはその後、犯人捜しに執念を燃やすことに・・・。

◆日本映画でも熱血刑事は多いが、韓国映画の熱血刑事はそれ以上。それは、『エクストリーム・ジョブ』（19年）に登場した7人の刑事たちを見ればよくわかる（『シネマ46』239頁）。同作の刑事は韓国では珍しく（？）チームプレイに徹していたが、本作のチョン刑事（キム・ムヨル）は本来の韓国らしく（？）一匹狼。もっとも、違法捜査（スレスレ？）はやってもワイロは受け取らない主義だから、意外に几帳面で警察への忠誠心も旺盛らしい。ドンスが刺されたことで犯人がヤクザではなく、偏執狂の男だと判断したチョン刑事は、唯一の目撃証人であるドンスに協力を求めたが、ドンスは断固拒否。ところが、ある日彼は急遽方針転換を。それは一体なぜ？それが本作中盤の見どころだ。

しかして、共通の目標に向かって、ドンスとチョンが走り始め、前代未聞の極悪組長と暴力刑事との共同捜査が始まったが、さて犯人は？

◆3人の共演といっても、やはり本作の核心はマ・ドンソク演じるドンスだから、中盤から意外にハンサムな顔を見せる犯人K（キム・ソンギョ）の人物像の描き方が少し雑になるのは仕方ない。なぜ、この男はこんな凶悪事件を次々と？その動機については観客がしっかり考える必要がある。

極悪組長と警察が大規模に犯人の顔写真を持って共同捜査に臨めば、犯人検挙はイチョロ。そう思ったが、意外に手こずる中、ド派手なカーアクションも炸裂！

◆犯人を挙げるのはどちらが先？それがチョンなら、法に従った逮捕だが、ドンスならヤクザのやり方でお好きなように。2人の中にはそんな密約（？）があったが、ドンスから強引にKの身柄を確保したチョンは、法に従ってKを裁判にかけたから、さあ面倒だ。そこでのKと弁護士の対応は？それだけを描いても一本の映画になるテーマだが、本作はそれを本作の最後の面白いネタ（オチ）として使っているのだから、それに注目。

さあ、Kの判決は？そして、その裁判に「検察側の証人」として出廷したドンスの処分は？さらに、それを前提として、本作ラストに訪れるドンスとKとの「ご対面」は一体何を意味するの？

2020（令和2）年5月26日記